百年後の箱根を美しく保つために

函嶺白百合学園中学校　三年　西　帆希泉

箱根には、何回訪れても見飽きないような自然があふれています。特に、季節ごとに姿を変える様子は、まるで別の場所に来たのかと錯覚するほどで、見るたびに新しい発見があり、惹きつけられます。

春には、彩度の高い鮮やかな緑が見渡す限り広がり、そしてその中に確かな存在感を放つ赤い電車。この見事な光景に心奪われる観光客は少なくないでしょう。そして梅雨に入れば、登山電車は「あじさい電車」という愛称で、車窓に触れるほど近くに咲く色とりどりのあじさいの横を走行していきます。秋になれば春の山とは打って変わり、紅葉した葉がひらひらと舞います。紅葉と言っても、赤色、オレンジ色、黄色、ところどころにまだ夏に浸っているマイペースな緑色の葉もちらほら。いろんな色の葉で山が深く美しい色に染まります。ただこれも、冬になれば木々は全身に雪をまとい、目を疑うほどの銀世界が広がります。こんなにも四季折々に情景が大きく変わるのは、やはり箱根が豊かな自然に恵まれているからでしょう。

しかし、一見手つかずとも思える箱根の自然は、箱根を大切に思い、守ろうとする人たちの努力の上に成り立っているのです。

箱根町に人が住み始めたのは、先土器時代後期と言われています。古から箱根は私たち人間を魅了し続けてきました。二十世紀になり、１９１４年に日本初のフランス式整形庭園である「箱根強羅公園」が開園し、国の内外を問わず多くの観光客の目を楽しませました。１９７６年には水湿地に生息している植物を中心とした植物園である「箱根湿生花園」、ついで１９９１年には動物や植物の展示を通して森林の大切さを理解していただく「森のふれあい館」など、地域の特性を活かした様々な施設が開設されました。このような活動が功を奏し、箱根には年間を通して絶えることなくいろいろな国から観光客が訪れています。その数は年間でおよそ二千万人にも及ぶと言われています。

このように、箱根はその美しい自然と、それを守り伝えようとする箱根を愛する人々によって、日本の代表的な観光地として親しまれているのです。

この箱根を末永く守ろう、と箱根町は１９７１年に箱根町全域を都市計画区域に指定し、乱開発の防止に努めたり、１９７５年になると緑の減税制度や銀行制度を創設したり

しました。また平成に入ると、箱根町資源保全基金を設置するなど、自然の保護と開発との調和を常に大切に考えて町づくりを進めてきました。

では、このように町だけが頑張れば箱根は綺麗なまま、これからも愛されていくのでしょうか。それだけではありません。箱根を訪れる観光客や住民を含めた箱根を大切に思うすべての人たちが自然を守ろうと意識していくことが必要です。

近年、世界中で問題となっている森林破壊。このまま森林破壊が進行すれば、私たちの目を癒す木々が少なくなるのはもちろんのこと、森の生態系にも大きく影響し、野生の動植物を絶滅の危機にさらしかねません。そのほかにも、森林の減少により地球温暖化に拍車がかかり、気候変動の原因となってしまいます。日本でも、猛暑日の日数の更新や一日の降水量が史上初という言葉をよく耳にするようになっています。つまり、日本の誇りである箱根にも多大な影響が出てしまい、自然豊かな現状の箱根が失われてしまうかもしれない危機的な状況となっているのです。そうなれば必然的に箱根を訪れる人も減少して、箱根が廃れていくのは明らかです。

私は、十年後でも百年後であっても、今と変わらない美しい箱根が残ってほしい、そして、何度でも来たいと思ってもらえるような場所であり続けてほしいと願っています。そのために必要なことは、まず、できるだけ多くの方に箱根に来ていただき箱根の魅力に触れてもらうこと。そして、共に箱根を守ろうという意識をもってもらうこと。そのうえで一人ひとりが箱根を守る行動を起こすことだと考えます。自分にできる範囲で、身近なところから。例えば、エコバックを使ったり、マイボトルを持参したりと森林破壊や地球温暖化を食い止めるような行動をすることが、箱根の明るい未来をつくることに繋がります。

小さなことでも、自分にできることはやってみる、この精神で箱根の、日本の未来を一緒に守っていきませんか。さあ箱根に行って、その魅力に浸り、それぞれのできることから始めていきましょう。